

## ■カンタータ第33番<BWV33>

「ただ汝にのみ、主イエス・キリストよ」

1724年9月3日、三位一体節後第13日曜日に初演されたコラール・カンタータである。当日朗読される福音書章句、ルカ福音書第10章の「慈悲深いサマリア人の比喻」に示される隣人への愛を通じて、キリスト者としての真の信仰と神への愛を、コンラート・フーベルト作のコラールを軸に掘り下げていく。翌週の9月10日には名作カンタータの第78番「イエスよ、汝はわが魂を」が初演されるなど、まさに円熟期のバッハの筆の冴えを如実に示す逸品である。

第1曲のコラール合唱（イ短調 3/4）は、2本のオーボエと弦による活発な走句の模倣で開始される（譜例①）。3拍目に出る十字架音型をあらゆる器楽声部が間断なく奏することにより、キリスト者とともにあるイエスの存在を暗示する一方、シンコペーションや同音反復のリズムが、キリスト者のイエスに寄せる堅い信頼を象徴するかのよう響く。合唱は、例によって長い音価でソプラノによりうたわれるコラール旋律を、アルト以下の三声部が自由なポリフォニーで支えていく。下三声部はソプラノのコラール旋律内に常に収まり、その展開も他のコラール・カンタータに比べ簡潔だが、それだけにキリスト者の固い結束とイエスに注ぐ熱誠の眼差しを聴くものに印象づける。

第2曲のレチタティーヴォで、通奏低音のみを従えたバスが、神の御前で自らの罪を告白するも、後半では、赦しを得た喜びのアリオーソに変容する。続く第3曲は、このカンタータの魅力の中核をなす長大なダ・カーボアリアが置かれる（ハ長調 4/4）。不思議な浮揚感をもつ弱音器つきの第1ヴァイオリンのオブリガートと、一貫してピッチカートで奏される弦を伴い、アルトは不安によるめくさまを絶妙に活写する。半音階下降進行に由来する晦渋な和声と虚空を彷徨うがごとき旋律。だが、イエスによる執り成しと慰めの言葉を得たアルトは、不安なよろめきを払拭し確然と歩み始める。1年前のカンタータ第105番の有名なソプラノ・アリアとよく似た発想のアリアであるが、それとは対照的に、ここでは通奏低音の歩みのモチーフが一貫して鳴り響き、イエスへの信頼から醸成される静謐が全曲を支配する。バッハそのひ

とでなければ書けないであろう名アリアである。

第4曲のテノールの語り、真のキリスト者の信仰が愛を通じて動き続けることを宣すると、2本のオーボエと通奏低音によるトリオを伴い、テノールとバスが文字通り愛のデュエットを奏でる（第5曲 ホ短調 3/4）。3度や6度の甘美な平行進行をしばしば響かせ、同種類の器楽、隣接する声がお互いに共鳴しながら寄り添うことで、このカンタータの主題である隣人への愛を絶妙に具現化する。これを支える通奏低音の特徴的なリズム（譜例②）は、マニフィカトBWV243の第2曲にも現れる聖霊による祝福の表象であろう。

終曲は、第1曲で鳴り響いたコラールの最終節を四声体で唱和する（第6曲 イ短調 4/4）。コラール旋律にはリート風のなめらかな動きが施され、三位一体への讃美を力強く表明し全曲を閉じる。

### 【カンターター口コラム】

このカンタータの魅力は、それぞれ個性的なアリアとデュエットに負うところが大きいです。第3曲の大規模なアルト・アリアは、今日的に言えば「よろめきアリア」（「よろめきドラマ」とは何の関係もありません）、第5曲の二重唱は、低音男声による「おっさんずデュエット」とも称することが可能ですが、実は両曲とも、バッハのブランデンブルク協奏曲とテーマが類似しているのです。第3曲のシンコペーションを伴う「よろめき」のモチーフは、ブランデンブルク協奏曲第6番の第1楽章主題とリズムの面で共通しており、第5曲のテーマは、同じくブランデンブルク協奏曲第1番第4楽章の第1トリオ冒頭と類似していません。偶然とはいえ、興味深い現象です。当カンタータの親しみやすさも、案外こうした類似性に起因しているかもしれませんね。なお、教会カンタータにおいては、ブランデンブルク協奏曲第1番の第1楽章と第3番の第1楽章が、それぞれカンタータ第52番、第174番の冒頭シンフォニアに転用されています。

譜例①



譜例②

